悲しい恋愛

火華舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悲しい恋愛

【Ｎコード】
Ｎ０６９６Ｈ

【作者名】
火華舞

【あらすじ】
恋愛をしたい、三十路の男の前に現れたのは。幽霊の女の子。大阪で生まれた、奇妙な恋愛物語。優しさだけが取り柄の三十路男と幽霊とは思えない程の明るい性格の女の子。２人に待っているのは、どんな恋愛かな？

1夜

「お疲れ～」
高校からのツレのスケと、その彼女のユウとで、今日もユウのマンションで、今週…水曜日にして早くも2回目の乾杯…
部屋にはユウの子供が3人、静かにテレビを見ている。
ユウの家は母子家庭でスケが転がり込んでいる状態で、そんな空間に俺が入って乾杯をしている。
「いや～、今日も1日頑張った！」
毎回、話す内容は同じ様な事だけど、楽しいものだ。ユウのスケに対する愚痴、その日の出来事、外せ無いのは、2人の、のろけ話。
そんな話に夢中になっていると時間が経つのは早いもので…気が付くと…12時半過ぎ。
「ぬぁ！1時前やん」
「うぉ～！マジで、こんな時間やん」他人事の様にスケの返事が返ってくる。
「他人事みたいに言うけど…他人事か？でも明日は休みかい？」
『仕事～』
と、2人から即答。
「他人事ちゃうやんけ！」
等と掛け合いをしてる内に1時は過ぎ…
「ヤバイ、マジで、そろそろ帰るわ」
『お疲れ～』
2人に見送られて家路に着く。
自転車で15分位走れば自分のマンションに着く距離なので、毎回ほろ酔い気分で自転車を漕いで帰っていた。帰り道には墓地が1箇所有り、いつもは何も無く通り過ぎるのだが今日は何故か墓地の方を見つめた。
「何か居てるなぁ」墓地を通り過ぎる時に墓地の隅の方に確かに何

か居た。
でも、
「それ」を見る事は昔からタマにあった。
だから、余り驚く事は無く気付かないフリをして通り過ぎる。
あの手の類いは自分が見えていると気付かれると憑いてくるからだ。
余談だが、小学生の時に実家で
「小豆磨ぎ」らしき爺さんがミシン台の上に座っているのを見てから時々見る事がある。
…友人にはバカにされるが、本当の話である。
それは良しとして、今のは女の人みたいだったが…
そういえば、おれも今年３３歳になる。
彼女も居ないなんて寂し過ぎる。
先程迄スケの所で呑んでる時にも家族って良いなぁ等と思っていたが、やはり帰り道や部屋に入る時には１人は寂し過ぎる。等と１人でブルーになっている間にマンションに着く。
「ただいま～」
真っ暗な部屋に寂しく響く声。
やはり淋しい！
とりあえず明日も仕事なのでシャワーを浴びサッパリした所に少し一息する。
「さて、寝ますか」電気を消し布団に入る。
最近、ソファーベッドにしてから何故か寝やすくなった。
しかし、事件が起きた。
『居る…』
『居る居る居る居る居る居る居る居る～っ！！何か居てる～っ！！！！』
部屋の隅に確かに居てる。
今までも何回か居た事はある。
こんな時の対処法は寝る！何も考えずに寝る。
翌朝、携帯のアラームで目が覚めた。

その日から2日が過ぎ土曜日の夜。
またもやユウとスケとの呑み会に呼ばれ、ほろ酔いでの帰り道、例の墓地を通り過ぎる。ヤバイ、又居てる！
いつもの様に知らん顔で通り過ぎる。
マンションに着き、いつもの様にシャワーを浴びて一息。
『今日は出ぇへんやろな～』等と思いながら電気を消し布団に入る。
誰かの視線が突き刺さる。
『やっぱり居るよ』
いつもの様に無視して仰向けに姿勢を代えた時、心臓が止まりそうになる。
目の前に女性の顔が有り、俺の顔を覗き込んでいる。
「ウチの姿…みえてるんちゃうの？」
彼女が一言、話し掛けてくる。
しかし、少し拍子抜けした。
幽霊の声は昔から低音で怖いイメージがあったが、目の前の幽霊は何故か高いと言うより可愛い感じの声だった。
その声を聞いたら恐怖は何処かへ行っていた。
しかし幽霊は幽霊である。
『ヤバイ！バレてる。』
咄嗟に目を瞑り、心の中でお経を唱える。
暫くして目を開けると彼女は消えていた。
「うわぁ、危なぁ　～憑かれたかと思った。」
安心して横向きになり、目を瞑ろうとした瞬間。
幽霊が正座していた。
『お経…効いてねぇーっ！』
彼女は微笑んだ。
「やっぱり見えてるんやね、声まで聞こえてるみたいやし。」
万事休す。
『お父さん、お母さん、もう僕は永く無いみたいです。』
「ちょっと聞いてくれる？」

突然、幽霊が喋り出す。「みんな、私の事を話し掛けても無視するしさ」
『そりゃ、幽霊だからムリだって。』
言いそうな所を我慢する。
見て逃げるとか、通る人への不満を小一時間喋り終えると彼女は満面の笑みを向けてきた。
「聞いてくれて、アリガトね。」
一瞬、その笑顔に見とれた。
「どうしたん？」
彼女の言葉にみとれたまま…
「おまえ…可愛いな。」
言って我に返る。『ヤバイ！幽霊相手に俺は何を言ってんねん』
どう繕えば良いか考えるが頭は真っ白のままだ。
「ありがとう。」
俺が呆けていると彼女がポツリと言った。
「初めて言われた…幽霊になる前にも言われた事無かったのに。」
少し悲しい笑顔を見せながら彼女が言った。
「えっと、あの、何て言うか…」
あたふた困っている俺を見て彼女は
「今日は楽しかった。初めて私の話を聞いてくれる人が現れて、しかも…」
少し彼女が恥ずかしそうに俯きながら、
「生まれて初めて可愛いって言われたしね」
『幽霊になってからだけどね』
俺はツッコミたい衝動を堪えた。　ツッコミは関西人の性だ。
「あっ！幽霊になってからだ」
思い出した様に彼女が言う。
「自分で言うんかい！」
ここでツッコマ無いのは関西人じゃ無い！
「これで私も成仏出来そうやわ、アリガトねバイバイ」

彼女は嬉しそうに笑うとスゥーときえてしまった。
俺は何だか嬉しい気持ちになりながら布団に入る。
「何か良い事したんかな？」
天井に囁く。
助かって良かった～。と思いながら眠りに落ちた。

第2夜

月曜日の朝。
「お坊っちゃま、おはようございます。」
携帯のアラームで目を覚ます。
何とか身を起こすが、何だか　まだ夢の中に居る感じがする。
「あんまり寝た気がせん」
土曜日の夜に明るい幽霊にあった。
愚痴を聞かされた。
「…」
頭が働かない…　　ボーとしたまま洗面台に向かい歯磨きしながら
幽霊の事を考える。
「ちゃんと成仏したかな？」
鏡に映る自分に問い掛ける。
『大丈夫』
今は、そう願うしかない。
昨日は昼過ぎに起きた。
起きてからは予定も無く、ただダラダラと過ごした。でも、どうも
明るい幽霊の事が気になっていた。
昼まで寝てたのも災いしてか、なかなか寝付けなく夜中の3時位ま
で起きていた。
幽霊の事を待っていた自分も居たのかも知れないが…とりあえず今
は出社だ。

9時に出社して18時に退社。
いつもと変わらない日常を過ごして帰宅する。
部屋に入ると真っ暗な闇が待っていた。
「はぁ～何か今日も疲れた～」
愚痴を言いながら電気のスイッチに手を伸ばす。

「お疲れさま」
労いの言葉が掛かる。
「ほんま疲れたわ、何して疲れたか解らんけど。」
会話をしてるが俺には違和感があった。
「ほんまに、そうやなぁ～、仕事って何か疲れるよねぇ～。」
と女の子の声が返ってくる。
「それで、自分の部屋に着いたら直ぐに寛げるもんなぁ」
…やはりオカシイ。
「って、何で俺の部屋に居てんねん！」
違和感の正体は解っている。
そもそも誰も居ない部屋で声がする時点で間違ってる。
そこに独り言みたいに俺が1人で会話をしているのを連れが見ていたら即、病院に連れて行かれるだろう。「成仏なさったのでは？」
何故か丁寧口調になる。
「なんでやろ…出来ひんかったみたい」
彼女は少し悲しい笑顔で答える。
そして少しの沈黙が流れる。
「少し話そうか？」彼女のそんな姿を見ていると自然に声を掛けていた。
「うん！ええよ。」彼女は満面の笑顔で答える。
俺はその笑顔にドキドキする。
「可愛い顔して…」ポツリと呟く。
「んっ？どうしたん？」
「何も無いよ。」
俺はイタズラっぽく答える。
「うち、かすみ！澄んだ香りって書いて香澄。」
彼女は自己紹介を始めた。
「俺は、カズ。カズでも、カズ様でも、カズ将軍でも好きな呼び方で良いで」
すると彼女は即答で、

「カズゴメス！」
『何の名前ですか～』
「ごめんなさい、カズでお願いします。」
「仕方ないなぁ～、良いよ、カーズ」
彼女が笑顔で言う。
少し俺は照れ臭くなる。
「あ…そうそう、お互いの名前も分かった事やし話そうや」
俺は彼女に悟られない様に話を振った。
「うん」
俺がソファーに座ると彼女は返事をして隣に座る。
お互いの食べ物の好き嫌いや香澄が余り生前の記憶を余り覚えて無い事等を3時間程話した。
「それで、何で成仏は出来へんかったん？」
俺は率直に疑問を聞いてみる。
「ん～…まだ未練が残ってるんかなぁ？」
彼女は少し悩みながら答えた。
「でも、この前に成仏が出来そう。とか言ってなかった？」
続けて質問をする。
「あの時は出来ると思ったんよ」
彼女が少し困った顔をする。
「香澄の未練って何やったん？」
「よくは解らんけど、カズと…男の人と楽しい時間を過ごしたから…」
「えっ？」
俺は一瞬喜びそうになったが話を整理してみた。
「香澄は、男の人と仲良くした事が無いの？」
すると彼女は照れながら
「そんなん有る筈無いやん。生きてた頃は、ずっと女子校で寮住まいだから男の人なんて周りには居なかったんよ。」
「案外…記憶有るんちゃうん？」

俺は思わず突っ込む。
「有ると言えば有るんよ。でも、大雑把にしか覚えてないんよ。」
彼女の顔が少し曇る。
「ゴメン…変な事言って」
空気が少し重くなった感じがした。　「そんなん全然良いよ。カズが気にする事じゃ無いから…」
香澄は心配を掛けまいと精一杯の笑顔を作ってみせた。
「そろそろ行くね。」
そう言うと彼女は立ち上がった。
「気を付けてな」　俺は少し後ろ髪を引かれながら見送る。
「うん、今日は有り難うね。凄く嬉しかったよ！」
彼女は満面の笑みを俺に送ると窓に向かって行った。
「またな！又おいでな。」
窓に消えていく彼女の背中に向けて声を掛けた。
「はぁ…でも何か楽しかったなぁ」　もう一度ソファーに座り、1人になり少し広く感じる部屋で落ち着く。「そうだね～何だか私達は合いそうだよねぇ」
俺は飲みかけた物を吹き出しそうになる。
「グハッ…ゲホゲホ…何…何で居てるんゲホ、さっき感動的に別れたとこやん。」
俺は噎せながら声の主…香澄に質問する。
「あはは、それが何故だかカズに取り憑いちゃったみたいで…帰れなくなっちゃった。」
彼女は凄い事をサラッと言ってのけた。
「なんですとー！！」こうして幽霊との同居生活が始まった。

第3夜

香澄に憑かれてから数日間…
少し距離も縮まってきた頃、香澄の未練の事を考える様になっていた。
「なぁ、香澄は自分の未練て何か解らんの？」
テレビを見ながら聞いてみる。
「ん～、そう言われてもウチも良く解らんのよ」
確かに香澄が前迄　考えてた未練は違っていたから仕方がない。
「明日は土曜日やし散歩がてらに少し香澄の居た墓地の回りに行ってみよか？」
彼女の反応を見てみる。
「え～、良いの？
カズと散歩。
初めて男の人と出掛けるよ。」
自分の事に踏み込まれる事を嫌がるかと思ってけど、そういうのは無いみたいだな。
でも、男の人と出掛けるのが初めてで恥ずかしがる前に一応だけど同居してる事には気付いてるんかなぁ？
土曜日の朝
「早く行くよ」
香澄に急かされながら家を出る。
「天気が良くて良かったな」
思わず漏れた言葉にハッとする。
香澄は幽霊で他の人には見えないから普通に喋ってると変な人に間違われる。
「香澄」
回りに人が居ないのを見計らいながら香澄に声を掛ける。
「んっ…どうしたん？」

「外では悪いけど普通の人に香澄は見えへんから…」
と言い掛けると…
「解っとるよ、ウチは幽霊やねんから良く解っとるよ」
そう言う彼女を見て胸がチクッとした。
「さぁ、とりあえず歩いて墓地迄行こか！」
彼女は俺の横を歩く様に付いてくる。
とりあえず香澄の居た墓地に行く事にした。
向かう途中に香澄に覚えてか確認をしながら歩いて行くが香澄は覚えて無いと言うより解らないといった感じだ。
「この辺も解らへん？」
一応は聞いてみるが。
「ごめんなぁ、幽霊になってからは見てるけど生きてた時の事は思い出せんのよ。」
彼女は少し困った顔で答える。
「いや、全然良いねん。」
俺は笑って答える。
２０分程歩くと目的地の墓地に着いた。
「なぁ、何か思い出した？」
俺の問いに彼女は難しい顔をしている。
「それじゃ、俺は墓石に香澄の名前が有るか見ていくから香澄は遠くには行かれへんと思うから周りを見ながら付いといで」　彼女は右手を挙げて
「はーい」
元気に返事をする。
俺は１つ１つ墓石を見ていく、その上で彼女が回りを見ながら心当たりを探している。
全ての墓石を見ると言っても数は１００にも満たない数である。
「あっ！カズあっちの壁の方に行ってみよ」
香澄は何かを思い出したのか言われた方に行ってみる。
「この辺？」

言われた壁近くで聞いてみる。
「うん、ちょっと待っててね」
彼女はフワフワと３m位の壁の上へと浮いて行く。
少しして彼女が降りてくる。
「ゴメン…何か思い出せるかと思ったんよ、でもダメみたいやわ…」
彼女は少し位顔をする。
「何を言ってんねんな、その為に来てんねんから何か有ったら何でも言いや」
それから2時間程墓石を見ながら香澄の気になる場所にも行ってみたが手掛かりも無く、名前も見当たらなかった。
彼女は少し申し訳なさそうな顔をして下を向いた。
「大丈夫！そんな焦らんでも、ゆっくり思い出したら良いからさ。」
「…うん…ありがと」
彼女は俯いたまま消えそうな声で言った。
こんな時まで俺は何で彼女に何もしてあげれないんだろう…彼女を抱き締めたいのに触れる事すら出来ないなんて。
「それに、余り早い事思い出されても俺が寂しいやん」
言った後少し恥ずかしくなり香澄に背を向ける。
「この回りを少し歩いて…」
言い掛けた時、彼女の手が腰に有るのに気付いた。
彼女が後ろから抱き締めてる様なカッコになっている。
「触れる事が出来たら良いのにね、　今ね…私は凄くカズを抱き締めたいんよ」
出来る事なら俺も抱き締めたい…
「お、俺も凄く香澄を抱き締めたい」
彼女は少し黙っている。
「カズは優しいね…でも嘘はダメだよ…嘘はね癖になるんよ」
「ちゃう、俺は！」
「カズは本当に優しいなぁ、カズは優しい嘘のつもりでも優しい嘘も良い嘘も悪い嘘も嘘はクセになるんよ。」

そう言う彼女の声は寂しい感じがした。
彼女は俺の前にクルッと回り込むと
「なんてね、さぁ行こうか！」
と言って彼女は俺の前を進んでいく。
「行きますか」
俺も後を付いて行く。
俺の前に来た時に彼女は笑っていたが彼女の目からは涙が流れていた。
この後は暗くなる前までウロウロ周辺を歩いて回ったが手掛かりは見つからなかった。
香澄は何も無かった様に明るい彼女に戻っていたが俺には、忘れられない1日となった。
彼女の言葉…俺の彼女への気持ち…変な蟠りだけが残った1日。

第４夜

あの日から幾日が過ぎた。
香澄は何も無かったかの様に前と同じ様に過ごしている。
俺も変わらず過ごしている。
…と言いたいが、あの日から変に彼女の事を意識している。
彼女の事を意識してはダメな事も、意識したら２人ともが傷付く事も解っていた。
解っていても、彼女に惹かれているのも確かだ。
しかし、その彼女は前の事は無かったかの様なかんじである。
只単に俺の事は何も感じ無いのか、興味が無いのか、どうとも思っていない様子である。
でも、俺は彼女とは反対に意識しない様にしているつもりだが確実に以前よりもギクシャクしている。しかし！今日この雰囲気を打ち破る最高のイベントがある。
花火大会だーっ！
思わず片手が天を突く。
「どうしたん？１人で何をやっとるん？」
彼女の言葉に一瞬固まる。
「い、いえ何でも無いよ。あはは…」
「変な人やねぇ」
今は何と言われても構わん！この雰囲気を打ち破る為なら俺は修羅になる！…」
俺は握り拳で小さくガッツポーズをして天を仰いだ。
「やっぱり、今日のカズは変やわ。…でも見てるとオモロイわ」
何故か少し嬉しくなった。
大阪人の性か、又は香澄に言われての事なのかは解らない。
だが、やはり好意を持っている相手に言われるのは嬉しいものだ。
まだ昼過ぎなので、花火大会迄には時間がある。

だからと言って外はマズイ…
外出をして花火大会を知られたらサプライズにならない。
「よしっ！昼寝をしよう」
俺は宣言する。
「何なん、それ！」
彼女が詰め寄ってくる。
うぉっ…今まで窓の所に居たのに…はやっ。
突然、彼女の顔が目の前に現れたのでドキッとした。
『俺の気持ち解ってんのかなぁ…』と思いながら彼女の顔に見とれていると…
「も、もう良いよ。」
彼女は頬を染めて後ろに飛び退く。
その彼女を見て俺も恥ずかしくなり、顔を反らす。
「それなら、私は…カズが寝やすい様に散歩でもしてくるよ。」
香澄は微笑みながら言う。
俺は少し胸が痛んだ。
「違うねん、そう言う意味じゃないねん！」
俺は頭の中が真っ白になる。
「そ、それに一緒に居てくれる方が安心と言うか…心が休まると言うか…」
自分自身、何を言ってるのか解らなくなる。
「俺は傍に居てくれる方が良いねん。」
香澄は俺を見つめながら顔を真っ赤にした。
俺も自分の言った言葉で恥ずかしくなり、再び顔を反らす。
「あのさ、だから外に行かずに傍にいてくれへん？」
「…うん…」
俺の言葉に短い返事が返ってきた。
香澄は俺の横にチョコンと座る。
再び、沈黙が流れる。
…気まずい…

「そうや！テレビでも見ようや。」
俺はリモコンでテレビの電源を入れた。

テレビのチャンネルを数回変えるとお笑い番組がやっていた。
俺も香澄も、お笑いは大好きで毎日見ている。
「俺、このコンビ好きやねん。」
「ウチも好きやわ～。」
俺の言葉に香澄も同意する。
2人共お笑いの好みが似ている。
重い空気が溶けていく。
気が付くと夕方を過ぎていた。
「あのさ、近くで出店が出てんねんけど行かへん？」
俺の言葉に香澄はパーッと笑顔になる。
「行く！」
行っても香澄は見る事しかできないのだが…本人が喜んでるので良しとしよう。
「んじゃ支度して行こか？…着替えんの早いなぁ…」
俺が用意をしようとして立ち上がって振り向くと香澄は既に浴衣に着替えていた。
雰囲気作りの為か、浴衣に着替えたのか？…可愛い。
「早く、早く」
彼女に急かされて俺も慌てて用意をする。
用意と言っても財布や携帯電話を持てば用意完了である。
「さて、行きますか。」
「はーい！」
俺はサプライズに向けてドアを開けた。外は日も落ちて涼しくなり気持ちが良い。
近くに淀川が有り花火は毎年この川で打ち上げられる。
毎年この日は淀川の土手が人で埋め尽くされる。香澄の姿は他人には見えないので、俺が1人で寂しく花火大会に来てる様に見えてる

んだろうな…。
何だか、内心は気持ちの良いものでは無い。
でも、隣で楽しそうに夜店を覗いてる香澄の姿を見てると何だかデート気分で他人の事は気にならなくなった。
「香澄」
俺は少し小さめの声で彼女に声を掛けた。
「んっ？どうしたん」
彼女が振り返って俺の横に来る。
「何か、欲しい物ある？」
折角、来たので欲しい物を聴いてみる。
「えっ、買ってくれるん？」
「欲しい物ある？折角、来たんやし」
彼女は少し遠くを見ながら考えていたが。
「ん～、今は特に無いんよ…」
彼女は少し淋しそうに言った。
俺は、言った後にムチャクチャ後悔をした。
彼女は何も触れないし、口にする事も出来ない。
なのに俺は、1人で浮かれ過ぎていた。
俺はホンマにあほや！
凄く情けなかった。
「カズ？どうしたん？」
香澄が俺の顔を覗き込んでいる。
「えっ…あ…何でも、何も無いよ。あっち行ってみようや。」
俺は出来る限りの笑顔で答えると先に進む。
「うん…」
香澄は少し心配な顔をしながら後を付いてくる。
『何か、香澄が喜んでくれる物が絶対に有る筈や！』そう思いながら夜店を見て回る。
幾つか見て回っていると。
チリン…チリンチリン。

澄んだ音が聞こえて来た。
『…風鈴』
「香澄、こっち行こ。」
俺は少しテンションが上がる。
その店は夜店の列から少し離れた所に有った。
「風鈴？」
「そうっ」
彼女の質問に答えながら店に近づく。
「にいちゃん、ちょっと見さしてな。」
夜店の人に声を掛ける。
「らっしゃい、ゆっくり見ていってや。」
夜店の人は気の良い人ばかりだ。
「綺麗な音やし、可愛いのも多いなぁ」
香澄に話し掛ける。
香澄は、目を輝かせながら風鈴を見ている。
「にいちゃん、彼女に　あげるんか？」
店の人の声にドキッとした。
「な、何で？」
ドキドキしながら聞いてみる。
「何でって、にいちゃんメッチャ彼女の事を考えながら選んでる顔してるで。」
一瞬、香澄の方を見る。
彼女も俺の方を見ていた。
心臓が止まりそうになる。
2人して目を反らす。
「にいちゃん、この風鈴を頂戴や。」
俺は香澄が先程まで見ていた金魚の絵の描いたピンクの風鈴を手に取った。
「まいどあり」
店の人は笑顔で言うと風鈴を受け取り小さな箱に入れた後に袋に入

れて手渡してくれた。
「ありがとう。」
袋を受け取って店を後にする。
「そろそろ帰ろか？」
「うん、そやね」
お互いに少しギコチなくマンションに帰る。
少し早いが、そろそろ帰らないと花火大会に間に合わない。
「カズ、ありがとね」
香澄は買って来た風鈴を嬉しそうに眺めながらいう。
「んっ」
「凄い楽しかった。」
俺は少し照れ臭くなる。
俺は、バルコニーに出ると香澄を呼ぶ。
「香澄」
「んっ、何？」
「こっち、おいで。」
「どうしたん？」
「ちょっと、一緒に空を見ぃひん？」
「どうしたん？急に…今日のカズ、変な感じ。」
「今日は香澄と2人で見たいねん」
「またまた～」
と言いつつも、俺の横に来て空を見る。
少しすると。
ヒュルル…ドーン！
空に火の華が灯る。
「うわ～綺麗」
香澄の顔が一層輝いた。
「今日の空は綺麗やろ。」
香澄は俺の顔を見ると。
「うん、メッチャ綺麗。」

そのまま、2人で花火を眺めながめた。
最後の連発花火が上がって消える。
「終わってしもたね。」
彼女が口を開く。
「終わったなぁ。」俺は、部屋に入る事が出来なかった。
今、部屋に戻ると今日が終わってしまいそうだからだ。
「今日はホンマに嬉しかったんよ、何だかカズとデートしてるみたいで。」
「俺も、メッチャ楽しかったで。」
「でも、ゴメンなぁ…」
彼女が急に暗くなる。
「何で謝るん?」
俺は、彼女に問い返す。
「ウチなんかが一緒で、ウチは幽霊やから…何も食べられへんし触られへんし、折角のお祭りやのにウチが居てもカズは全然楽しまれへんやん…」
俺は、どうしたら良いのか解らなくなった。
でも、このまま香澄を放っては置けない。
俺は、堪らず彼女を抱き締める姿勢をする。
「…カズ?、何しとるん?ウチには触れられへんよ。」
「解ってるよ…でも、どうしても今は香澄の事、こうしたいねん。
俺は姿勢をやめない。
「ホンマに…カズはアホやなぁ〜」
香澄は俯いたまま
「でも、メッチャ優しいねん。」
香澄は、そう言うと俺の胸に顔をうずめる姿勢になる。
俺は彼女に触れる事は出来ないが、彼女が震えているのは分かった。
少し安心したのか彼女は声を上げて鳴き始めた。
俺は、そのまま遠くの夜景に目をやる。
夜景が、にじんで見えた。

第5夜

この前の花火大会の日、俺は確実に香澄の事が好きだと気付いた。
それに香澄も俺の事は悪く思っていないだろうし…
たぶん…
とりあえず、俺は香澄の事が好きだと言う事実に変わりは無い。
しかし、忘れがちだが相手は幽霊である。
…そう、幽霊…
どげんしよ！
俺、ダメじゃん！
もしかして？俺、危ない方に向かってる？
「カ～ズ」
「ぬぉっ！！」
いきなりの香澄の言葉に現実に引き戻される。
「えっ…何？」
俺は気の抜けた返事をする。
「んっ、カズが又おもしろい事になってたから。」
「ほえ…」気の抜けた声が出る。
香澄は、俺の事をどう思ってるんだろう？
俺の気持ちに気付いてるのか、気付いて無いのか。
香澄の行動では全然解らない。
『そうや、確認したろ！』
そう思うが直接には聞けない。
『そうや、デートしてみよう。』
そう考えると行動あるのみ。
「なぁ、少し出掛けへん？」
香澄に聞いてみる。
「ホンマに～、何処に連れてってくれるん？」
彼女は目を輝かせながら俺の方を見る。

余り人の多い場所は避けたい。
何故なら、３０も過ぎた男が１人で話しながら歩いてる姿を想像すれば解るが…怖い！
「…とりあえず、外に行こか」
俺達は、とりあえず外出する事にした。
とりあえず…デートの定番…
「水族館行こか？」俺は香澄に提案してみる。
「イルカ～！」
香澄は手を上げて返事する。
水族館なら暗いし見るだけやから香澄も楽しめる筈や。
行き先を決めたので駐車場に向かう。
これでも車位は持っている。
車に乗り込むと香澄はドアも開けずに助手席にすわる。
『幽霊って…車に乗れるんや…』
そう思いながら座席をみてみると驚いた事に座ってる様に見えたが座席から少し浮いていた。
このまま発進したら香澄だけ、すり抜けるかも知れない。
車を恐る恐る進めてみる。
すり抜けて…ない『行ける！』
無事に出発が出来て水族館に向かう。
水族館迄は車で３０分位である。
それまでの間、俺の好きな曲ばかりセレクトした音楽を聞きながら２人で世間話をした。
車に乗ってて気付いたのだが、香澄は乗ると言うより助手席に居る。
　といった感じだった。
車の出だしやキツメのブレーキをしてもピクリとも動かなかったからだ。
水族館に着き入場券を買って入る。
代金が１人分で良いので少し得した気分だ。
中に入って香澄と顔を見合せてクスッと笑う。

休みだからか、暑さを避ける為か、以外と人が居る。
「さて、何から見る？」
香澄に聞いてみる。
…姿が無い。
「カズー！凄いよ。魚メッチャ居てるで～！」
明らかにテンションの上がった声で大きな水槽の前で俺を呼ぶ。
思わず返事を返しそうになる。
溜め息を吐いて香澄の傍まで行く。
香澄と俺が離れる事の出来る距離は６ｍ位なので直ぐに見付ける事は出来る。
「ホンマやなぁ、メッチャ居てるやん。」
香澄は小さな子供みたいにキャッキャッはしゃいでいる。
俺まで自然と笑顔になる。
今日は水族館に来てホンマに良かった。
香澄の楽しく観て回る姿を見ていると心底そう思えた。
それからは２人で水族館を満喫した。
イルカショーでは２人でテンションを上げまくっていた。
帰りの車の中では水族館の話しで盛り上がった。
「ペンギンの散歩可愛かったなぁ。」
「可愛いかったけど、カズがペンギンの後を付いて行くからイルカショーの時間ギリギリやったんよ」
マンションに着いてからも水族館の話しが続いていた。
今日の俺の目的は香澄の俺への気持ちを探る事だったが俺は、どうでも良くなっていた。
俺と香澄、２人で楽しく過ごせるなら俺は十分だと思ったからだ。
「今日は疲れたから俺は寝るな。」
「うん、おやすみ。今日はメッチャ楽しかったで。」
香澄の満足した顔を見ると又、何処かに出掛けたくなる。
俺は電気を消して布団に入った。
疲れていたのか、俺は直ぐに眠りに落ちた。

『今日は良い夢が見れそうだ…』
俺は1時間位で目を覚ました。
『んっ…香澄？』体を起こして部屋を見渡すが香澄の姿が無い。
「バルコニーかな？」
香澄は夜空を見るのが好きらしく、よくバルコニーに居てる事が多い。
「やっぱり居てた。」
何だか香澄の顔が悲しそうに見えた。
俺はバルコニーに出て香澄に声を掛ける。
「どうしたん、暗い顔して？」
「カズ…起きたん？」
香澄は空を見上げたまま俺の方を向かない。
「綺麗な星空やなぁ」
「うん」
俺も香澄の隣で空を眺める。
2人で暫く静かに星空を見ている
すると、
「あのさ…カズは今日どうやった？楽しかった？」
「そら、当たり前やん、メッチャ楽しかったで。」
俺は素直に答える。
「ホンマに楽しかった？ウチと一緒でもホンマに楽しかった？」
香澄は、今にも泣きそうな顔で俺の顔を見ながら詰めよって来る。
『もしかして、俺の事を気にしてたんかな…』
そう思うと堪らない位に、いとおしく可愛く思えた。
「俺はホンマに楽しかったで。香澄は楽しく無かったん？」
「ウチはホンマに凄く楽しかったんよ！でも、…ウチ…幽霊やし…」
俺は香澄の言葉を遮る様に抱き締める様にする。
彼女は幽霊なので形だけなのだが何故か、この時は彼女の温もりを感じた様に思えた。
「カズ…？」

俺は香澄の顔を見る。
「俺は今日1日メッチャ幸せやったで！！」
俺は出来る限りの顔で笑ってみせた。
「アリガトな。」
「何でカズが、お礼を言うんよー！ウチが言わなアカンのに…」
香澄は目に涙を溜めながら言う。
「多分…香澄より俺の方が幸せやったから。」
この後、香澄が落ち着く迄少しの間2人で星空を眺めた。

第6夜（前書き）

今作は…
いつもはカズ目線のストーリーですが、香澄の目線で読んでみて下さい。
いつもとは少し違った気持ちになれると思います。

第6夜

あのデートから1週間が過ぎた。
「土曜日も出勤なんて大変やなぁ」
今日は土曜日だけどカズは会社に出勤らしい。
「仕方ないやん、俺の会社って土曜は隔週で休みなだけやもん」
カズは少し、ふくれて言う。
何だか子供が無理矢理に勉強をさせられてる感じに見えた。
『たまに、カズって子供みたいに可愛い時が有るなぁ。』
そう思ってみてると会社の人達が帰り支度を始める。
「まだ12時なってへんやん、帰るん？」
カズは会社の人に声を掛ける。
「うん、帰るよ。」
アッサリと返事をされる。
確かに15分程早いみたいだ。
「んじゃ、俺も帰ろう。」
カズが、こっちを見てニコッと微笑む。
会社を出て駅まで歩いてると
「なぁ、ちょっと梅田に寄れへん？」
「寄る！」
ウチは即答した。カズの会社から梅田は近いので歩いて行くと言う
カズの提案で20分程歩いて向かう。
行く途中に人の列が見える。
「カズ～」
ウチは声を掛ける。
「んっ、どうしたん？」
「あの、並んでんのは何？」
カズは列の方を見て
「アレはロールケーキ買うのに並んでんねん。」

「ふ～ん…凄い人気やなぁ」
カズはウチの方をチラッと見て、
「堂島ロール言って、人気が有るみたいやで。」
ウチが行列の方を見てると、
「普通より、フワフワなだけやって。」
ウチが気にしているからか、カズは言葉を続けた。
「ふ～ん」
ウチも気にしてない素振りで返事をする。
「先ずは、百貨店でも見てみよか？」
そう言ってカズは阪神百貨店に入って行く。
カズは人混みでウチと話をする時は、携帯電話で話してる様にしている。
百貨店に入ると目的も無いので下の階から順番に上がって行く。
「こんな服どう？」
「カズ、センス無いわ～」
「…よく言われる…」
「あの、ゲームやってきて良い？」
「オモチャ屋さんの前で子供に混ざってまで遊びたいん？」
「子供相手でも、本気で勝ちに行くで！」
「おとなげないから、やめとき！」
「…はい」
「何かデートしてるみたいやわぁ」
「何で？デートしてんねんで。」カズが笑顔で言う。
ウチは恥ずかしくなり、思わず下を向く。
「香澄？」
「何もあらへん！」
ウチは恥ずかしさを隠す為にカズの前を飛ぶ。
『何よ、いきなりデートならデートって先に言ってくれたら良いのに…そしたら、もっと可愛い服にするのに！』
「何か…怒ってる？」

「別に何も怒っとらんよ！」
「怒ってるやん…俺は香澄と出掛けたいだけやってんけど…」
カズが肩を落とす。
「ゴメンな、俺は香澄と2人で部屋でゴロゴロすんのも、テレビ見てるのも大好きやで…でも、香澄と2人で出掛けたいねん…香澄の笑顔が見たいねん…」
『ウチはなんて小さい事を気にしてたんやろ…服装なんか気にしても他の人には見えへんのに…』
ウチはカズの横に行く。
「カズ、ゴメンなぁ、そんなつもりじゃ無かったんよ。」
『でも、カズの前やからこそオシャレしたかってんけどなぁ…』
「怒って無いんなら良いけど…」
「大丈夫！ちょっと服が気に要らんかっただけ。」「俺も、そりゃ可愛い服とか着てる方が嬉しいけど香澄が笑ってくれてる方がメッチャ嬉しいで。」
「そりゃ、カズには服のセンスは解らへんもんなぁ」
ウチはカズの顔を見てニコッと笑ってみせた。
「そりゃ確かに！」ウチはカズと顔を見合わす。
「そろそろ帰ろっか？」
そう言ってカズ歩き出す。
「うん！」

今夜もウチは夜空を眺めている。
部屋ではカズが布団で寝息をたてている。
ウチは本当に幸せ者やわ。
カズに逢えたのは本当に偶然やったかも知れんけど、ウチはカズに逢えて…逢えたんがカズで本当に良かった。
ただ…この身体になる前に逢いたかった…
そう思うと涙が溢れた。

第7夜（前書き）

今作は、前作から香澄の気持ちが変わってきてる　お話しです。

第7夜

何だかオカシイ…香澄の様子が確かにオカシイ。
この前に会社の帰りに買い物…いわゆるｓｈｏｐｐｉｎｇ!をして帰ってきてから何だか元気が無い。
今は2人で、お笑い番組を見ているのだが…。
「ははははっ何かこの2人おもろいな。」
「あははっ
、何語か解らんけどおもろいなぁ」
「…」
と日常的に見えるけど。
テレビを見ていても時折、香澄は思いに更ける様な顔をする。
もしかして！俺が何かしたんか！？
…解らん…何か全然、思い当たる所が無い。
本人には聞きづらいし…。
「ふーっ…なぁ…何か有った？元気無いみたいやけど？」
「…えっ、ウチ？ウチは元気やで。」
幽霊に元気といわれても、変な感じやけど…
「それなら良いねんけど…」
「うん…」
『話をしてくれるって事は俺は原因じゃ無いみたいやなぁ。』
そう思うと少し気持ちは楽になったが、それなら余計に気になる。
「少し、外に行けへん？」
少しでも、この雰囲気を変えようと提案してみる。
「そやね、行こか。」
『いつもなら、もっと乗り気なのに…』
そう思いながら用意をして外に出る。
外に出たものの、何処に行くでも無くフラフラと歩く。
『外に出たけど…何処に行こ…』

空はオレンジに染まって、買い物袋を持った人達が行き交ってる中で立ち話をしてる人達も居る。
何だか懐かしさを感じながら風景に溶け込む様に歩いていると、店からも良い匂いが漂ってくる。
「何か…良いなぁ。」
微笑みながらポツリと香澄が呟く。
「そうやなぁ」
そんな香澄を見てると俺も少し心が温かくなった気がした。
そのまま歩いて近くの公園のベンチに座った。
「少しは元気なった？只の散歩やけど。」
「えっ？何で、元気やで。」
香澄はニコッと笑う。
「そうやなぁ、香澄は、いつでも元気やんなぁ。」
「まぁね！」
「…でも…ホンマに何か有ったら絶対に相談してや。」
「うん…ありがと。」
「んじゃ！暗くなってきたし帰ろか。」
「うん」
人の少ない道で、のんびりと帰りたかっので俺達はマンションに帰るのに来た道とは違う道で帰る事にした。
『少しは気晴らしになったかな…』歩きながら、そう思って香澄の顔を見る。
香澄は沈んでいく夕陽を眺めながら少し離れて付いてきていた。
俺は、彼女の顔を見て少し　やりきれない気持ちになる。
夕陽に照らされた彼女の顔が悲しそうに見えたからだ。
俺は自分の無力さが悔しかった。
部屋に着くまでは、お互いに一言も話をしなかった。
部屋に着いても何を話して良いのか解らず少しの沈黙が続く。
「テレビでも見よっかなぁ」
俺は耐えられなくなりテレビを点ける。

「あっ！この番組始まってるやん」
香澄も空気を感じたのか、俺の隣に来てテレビを見る。
それからは、いつもと変わらない時間が過ぎたが少し蟠りが残った。
「さ～て…明日は仕事やし、そろそろ寝るな」
「は～い、おやすみ」
俺は部屋の電気を消すと布団に入った。
「ウチは少し外に居てるな。」
そう言うと香澄はバルコニーの方に行くと窓を通り抜け出て行った。

その姿を見ると、彼女が幽霊だと実感する。
「痛ぅ…」少し頭痛がした。
頭痛は直ぐに治まったので俺は布団に寝転んだ。
俺は、ボ～ッと天井を見つめる。
頭の中では香澄の事ばかり廻っていた。
考えれば俺は香澄の事は名前と今まで一緒に過ごして解った事しか知らない事に気付く。
やはり、気になる。
俺は布団から出ると香澄の居るバルコニーへと向かう。
俺は、ちゃんと窓は開けて出る。
「どうしたん？まだ、寝ぇへんの？」
香澄は俺を見て微笑む。
「ん～…ちょっと寝付けなくてさ」俺は、彼女の横に移動する。
「それに、香澄と一緒に居たいから」
「あはは、もうカズって上手いこと言うなぁ」
香澄は笑いながら言うと又、空を見上げる。
少しの沈黙が流れる。
「何でウチは幽霊なんやろ？」
香澄がポツリと呟く。
俺は、ドキッとした。
「ウチが生きてたら、もっとカズと違う毎日を送れたのに…」

「俺は、…今でも十分に楽しいで」
「ウチなんかと一緒に居ても何も楽しく無いやろ…」
彼女は俯く。
「そんな事無いで、一緒に居てるだけで俺はメッチャ楽しいで」
「手も繋がれへんし、外では普通に話も出来へんのにカズは楽しいの？」
香澄の声が少し震えてるのが解る。
「前にも言ったけど、俺は…」
「カズは平気かも知れんけどウチは…辛いんよ！」
俺の言葉を遮って香澄が大きな声で叫ぶ。
「解ってるんよ…カズはホンマに優しいから、でもウチは嫌や。」
香澄は下を向いたまま話を続ける。
「この前の水族館の時も、会社の帰りに買い物に行った時も、回りは手を繋いでたり、腕を組んでたり、本当に楽しそうにしてたんよ」
「それは、恋人同士やから…」
「ウチらは違うの？正直に言ってや…俺も普通の女の子と付き合いたいって言ってよ！」
しばしの沈黙が流れる。
「…うそ…ホンマはイヤや…ウチはカズがホンマにメッチャ好きやねん。」
「…俺も、香澄の事がホンマに好きやで」
「…ありがと…でも、生きてるカズにはウチの気持ちは絶対に解らんよ。」
俺は何も言えなくなった。
「ゴメン…嫌な事ばかり言って、気にせんといてな」
気にすんなと言われても俺は、どうして良いか解らずに只その場に立ち尽くすだけだった。
「カズ…ゴメンな、今は1人にしてくれへん？これ以上カズに嫌われたくないから…」
香澄は涙目で俺の方を向くと精一杯微笑んだ。

「解った…」
俺も、顔がひきつっているのが解ったが精一杯微笑んで部屋に入る。
俺は行き場の無い気持ちを抱いたまま布団に潜りこんだ。
俺は一体どうしたら良いのか全然解らなくなっていた。

第8夜（前書き）

今回は、最近は気持ちが通じ合って来た2人。
香澄の初めての事や、大変な事が起こります。

第8夜

「カズ、カズ君おはよ～」
耳元で起こす声が聞こえる。
「今日は休みやから…寝る…」
俺は目を開けずに言う。
声の主は解っている。
元気になってホンマに良かった。
「…」
何だか静かになった。
「…べんじょー！」
俺は叫びながら布団から飛び出す。
「キャ！」
香澄は驚いて俺の方を見る。
何故か、その手には…ピンクのカバ！
香澄の手にはピンクのカバの被り物。
「にぎゃーー！！」
香澄が叫ぶ。
「うにょー！！」
俺は叫びながら又、布団に潜り込む。
「見た？」
香澄が問いかけてくる。
「…」
俺は答えない。
「今、絶対にみたやんなぁ」
「…ゴメンナサイ」
「…」
「もーっ　ゴメンて！でも、そんな所で着替えてる香澄も悪いって。」

「だって、ビックリさせよ　　と思って起こしたのに起きひんし…
だから暑いから着ぐるみの上だけ脱いでたんよ。」
「それで…起きたら香澄さんは着ぐるみを半分脱いでて、起きた俺が　　その姿を見てしまったと言う訳ですね…」
「…」
「それって俺が悪いん？いつもポンと着替えてたやん、何で今日に限って半端な格好なん？」
「だって…昨日の晩に…だから」
香澄なりに昨夜の出来事を気にしてるみたいだ。
「昨日の事は気にしてへんで、香澄が元気になってくれたら俺は全然かまうわへんから。」
「…かず…ありがとう…」
良かった、少し心配だったけど…
「それじゃぁ～」
香澄がニコッと笑う。
「んっ、どうしたん？」
「昨日の事は終わって…ウチの裸を見た件は、どうしよっか？」
香澄の顔が近づいてくる。
「え～と…スンマセン」
俺は急いで土下座する。
「冗談やって、ウチも悪かったし」
香澄は、そう言いながら空中でクルクルと回っている。
「…良かった…でも、ホンマにゴメンな。」
「もう、良いよ。」
「痛つっ…」
急に緊張が解けてホッとしたからか少し頭痛がした。
「大丈夫？」
香澄が心配そうに見ている。
「大丈夫大丈夫。」
すると香澄は少し離れる。

「それなら良いねんけど…それじゃ、ちなみにウチの裸どうやった？」少し顔を赤くして香澄が聞いてきた。
「へっ？」
一瞬、俺は意味が解らず間抜けな返事をする。
「だから、ウチの裸を見て　どうやったかきいてんの！」
「…正直に言って良い？」
「…うん」
「綺麗やったで。」
言って、俺は香澄の顔を見る。
2人の目が合うと、お互いに顔を赤くして俯いた。
しばしの沈黙。
「あのさ…」
沈黙に耐えかねて俺が先に口を開く。
「んっ…どうしたん？」
「俺はさ…今のままでもメッチャ幸せやで、香澄が傍に居るだけで…」
今年の春は何処に行こうか～♪
今年の夏は何処に行こうか～♪
いきなり携帯が鳴る。
着信を見ると近くに住んでる友達からだ。
「ゴメンな…」
「ん～ん、良いよ出て」
俺は携帯に出る。
「はいはい」「うぃ～す！」
スケの携帯からだがユウの声だ。
「ほいほい、どうされました？」
「カズ～、何処に居てるん？」
「あの…部屋でテレビを見てますが…」
俺は香澄の顔を見る。
「ほんじゃ、今から行くわ。」

「…はっ？はい～？今からっすか？」
俺は又、香澄の顔を見る。
「それじゃ、３０分後にね。」
「マジで？」
「どうせ、暇やろ」
「そんなストレートに言われると…」
「それじゃ後でね、バイバ～イ」
「は～いす」
俺は電話を切ると香澄を見る。
「どうしたん？」
香澄は俺の横に来る。
「んっ…」
俺は、少し頭を抑える。
「大丈夫？」
「んっ…うん、大丈夫。」
俺は、何故か最近たまに頭が痛くなる事がある。
「え～と、６時位に連れが来るみたい。」
俺は、香澄に心配を掛けない様に笑顔で言う。
「へ～、そうなんや」
「連れが来るけど、良い？」
「んっ、何で？」
「えっ、一応…香澄が嫌なら断るから。」
「ウチは、良いよ。」
香澄は、俺の隣で微笑む。
昼に起きた俺は、とりあえず朝昼の兼用で御飯を食べ４時位迄、テレビを見ながらマッタリと過ごす。
４時過ぎになって俺は、今晩の為の買い物に出掛けた。
６時少し前に携帯が鳴る。
「ほいほい」
「もう着くけど、何か要る？」

俺は、冷蔵庫を見る。
「焼酎を割るジュースが無い。」
「ジュースだけで良いの？」
「まぁ、そうだね」
「それじゃ、ジュース買って行くわ」
「ほ～い、よろしく」
暫くして。
ピンポーン
俺はオートロックの解錠ボタンを押す。
少しすると。
カチャ、バタン、ガサガサ…
「お疲れ～」
スケとユウが部屋に入ってくる。
「お疲れ～」
俺はソファーに寝転んだまま返事する。
香澄は俺の後ろのベッドに座っている。
スケ達は、ツマミも買って来たらしくテーブルの上に出す。
俺は、冷蔵庫から缶ビールを出してユウにコップと一緒に渡し別に少し大きめのコップ２つに氷を入れて持って行く。
コップをテーブルに置くと、スケが焼酎とジュースを入れる。
これで用意は整った。
「おつかれ～」
俺達は、いつもの様に乾杯する。
いつもの様に、たわいも無い話をする。
暫くの間、楽しい話しに酔いしれる。
俺は、香澄の方を見ると香澄も楽しそうに笑っている。
俺は２人にバレない様に少し横にズレて香澄を手招きをする。
香澄は少し戸惑っていたが、直ぐに俺の横に来る。２人からすれば３人での呑み会だろうが、俺や香澄にすれば４人での呑み会。
香澄は隣で話を聞いてるだけだが、こういう場が初めてなのか凄く

楽しそうに見える。『ホンマは香澄が幽霊じゃ無かったなら、もっと楽しいねんやろなぁ』俺は、そう思わずには居れなかった。
「くっ…」
又、頭が痛み出す。
「どうしたん？頭が痛いのかい？」
スケが心配して聞いてくる。
「最近、たまに有んねん…」
「呑みすぎちゃうの？もしかして、もう二日酔い？」
ユウが冗談混じりに聞いてくる。
「なんでやねん！まだ、そんなに呑んでへんて。」
香澄も心配そうに俺を見ている。
俺は、立ち上がり御菓子を置いてる所に行く。
「ポテチは、うすしお、コンソメ、だし醤油、どれ行く？」
「ん～っ、うすしお！」
ユウの一声で決定。
ポテチを開けて、今度は、皆でテレビを見る。
夜の1時を過ぎた頃に、見るテレビも無くなった。
「そろそろ帰る～」
ユウが帰る宣言をする。
「んじゃ、そろそろ帰りますか？」
スケも次いで帰り支度を始める。
「忘れ物無いなぁ～」
俺は帰る前に確認をする。
「有ったら又、取りに来るさ。」
スケは親指を立てて胸を張る。
「そだね…」
俺は、玄関まで2人を見送る。
「おつ！」
「おつ！」
おつ！とは、おつかれ！の意味で昔から俺達の中で使ってる略語で

ある。
「おつかれ～、ごちそうさま。」
「あんたも、頭痛が酷いなら病院に行きや。」
スケが心配して言う。
「偏頭痛やろう？まぁ、とりあえず明日にでも病院行っみるさ」
スケ達が帰った後は部屋の　かたずけをして風呂から出ると2時前になっていた。
風呂上がりのマッタリタイム。
「今日はゴメンなぁ」
まだ余韻が有るのか、機嫌の良さそうな香澄に言う。
香澄はニコニコしながら俺の横に来る。
「全然、構わへんよ。」
「香澄は、呑み会とかは　した事は無いん？」
「うん！お酒も呑んだ事が無いんよ。」
香澄は、嬉しそうに言う。
「そうなんや。」
「だから、さっきみたいなんは初めてなんよ。」
「それは、良かったわ。」
『ホンマは、一緒に騒げたら良かってんけどな…そしたら、もっと楽しいのに。』
「その方が俺も嬉しいねんけどな…」
思わずポツリと口から漏れる。
「んっ何？」
香澄の呼び掛けに俺は、ドキッとする。
「えっ、別に…何か酔ったかなぁ～って。」
「ふふっ、よく呑んでたもんね。」
香澄が微笑む。
「さて、そろそろ寝るわ。」
俺は電気を消して布団に入る。
「おやすみ」

香澄は、そのままソファーに座りながら俺の方を見る。
「おやすみ～」

翌朝、俺は激しい頭痛で目を覚ます。
枕元では、香澄が心配しながら見ている。
「カズ、カズ、大丈夫？」
「う…うん、たいした事無いって…くっ…」
「ホンマに？ホンマに大丈夫なん？ムリしてへん？」
「大丈夫やって…」
俺は、ムリヤリに笑ってみせる。
香澄は泣きそうな顔で見ている。
少しすると、痛みが少しづつマシになってくる。
俺は、とりあえず会社に電話を入れる。
「おはようっす、今日ちょっと病院に行ってから行くから。」
俺は、会社に遅れる事を連絡する。「香澄ゴメンな、心配掛けて…。」
「そんなんは、気にせんといて！ホンマに大丈夫なん？」
香澄は、まだ心配そうに見ている。
「まぁね、だいぶマシやけど病院に行くから…心配せんで良いよ。」
俺は、そう言うと病院に行く用意をする。
「んじゃ、とりあえず病院に行くから。」
「うん、大丈夫？ムリせんといてや。」
「大丈夫！」
俺達は近所の少し大きな総合病院に行く。
「初診なんですけど。」
受付で保険証を渡す。
「それでは、こちらの用紙に記入の方をお願いします。」
病院は少し混んでいたが、俺は空いてる席に座って用紙に記入する。
「大丈夫？頭は痛く無い？」

香澄が記入してる正面に来て顔を覗きこむ。
「大丈夫やって！心配しな。」
俺は、ニコリと笑ってみせる。
その時、激しい頭痛が襲った。
「ぐっ！はぁはぁ…」
俺は、心配掛けまいと頭に力を入れる。
「カズ！カズ！」
香澄が、大きな声で叫んでいる。
「大丈…夫やっ…て…」
俺は、そのまま椅子から崩れ落ちる。
意識が途切れて行く中、香澄が泣きながら叫んでいる姿が目に入る。
『そんなに泣かんでも俺は大丈夫やって…』
俺は、そのまま意識を無くした…。

第9夜（前書き）

今回は、カズが動けないので香澄が目線です。
香澄の本心、未練が今作で明らかになります。
本編が少し長くなりましたけど、お楽しみください。

第9夜

「…カズ…」カズは病院のベッドで静かに寝息をたてている。
「このまま目を覚まさなかったら…」
そう思うと不安で、しょうが無い
カズは丸一日眠っている。
「何で…何でカズが…」
ウチはカズの横に居てる事しか出来ない。ガチャン
カズの母さんが来た。
昨日に病院でカズが倒れた後に病院が調べて連絡をした後に両親と兄さんが来ていたので直ぐに解った。
カズの母さんは殆ど昨日と変わらない部屋を少し片付けるとカズの横に座りカズに優しく話し掛ける。
「いつまで寝てんねや？早く起きや…」
でも、カズは起きる気配が無い。
少しの間、カズを見てカズの母さんは帰り支度をする。
「又明日、来るからね。」
カズに、そう言うと少し悲しそうな顔をして部屋を出ていった。
「カズ…」
ウチはカズの顔に触れようとする。
しかしウチの手はカズの頬を素通りする。
「うっ…う～っ」
ウチはカズの布団に顔を埋める。
何時間が経ったのだろう。
外は真っ暗になっていた。
「お姉ちゃん！」
小学校の低学年位の女の子がウチに声を掛けてきた。
「えっ…ウチ？」
ウチは女の子に問い返す。

「うん！」
女の子は微笑みながら頷く。
「あなた…ウチが見えるん？」
ウチは思わず問いかける。
「うん！見えるよ。だってサキは幽霊だもん！お姉ちゃんも幽霊だよね？」
自分の事をサキと言った子は首を傾げる。
「えっ…うん、ウチは幽霊やけどサキちゃんも幽霊なんや。」
「うん、私は昨日に死んじゃったみたいなの。」
「えっ…昨日に…」
「うん、ずっと入院してたんだけどね、昨日ね気が付いたら私の寝てる横に立ってたの。」
「…」
「それでね病院の先生が一生懸命に私を起こそうとしてて、サキのママがねサキに起きてっていってるの…」
ウチは、涙が溢れてきて、サキを抱き締める。
「お姉ちゃん、どうしたの？」
ウチは、何も言えずにサキを抱き締めた。
「でも、私は幸せだよ。ママやパパには、たくさん迷惑を掛けちゃったけど凄く大事にしてくれたから私の事で、もう困らしたく無いから。」
サキは嬉しそうに笑う。
「そこで寝てる人は、お姉ちゃんの大事な人？」
「うん、そうだよ…ウチの凄く大事な人。」
「そうなんだ…でも、このままだと死んじゃうよ。」
「えっ…」
ウチは、サキの言葉に動揺する。
「お姉ちゃん、そろそろ戻るね。」
そう言うとサキはウチの腕から抜け出して扉の方に駆け出して行く。
「ちょっと待ってサキちゃん！カズが死ぬって、どういう事なん？」

サキは、こちらを向くと
「お姉ちゃんが居てるから！」
そう言うと扉に姿を消した。
「ウチ…ウチが居てたらカズは…」
ウチはフラフラとカズの横に愕然と座る。
「どうしたん？泣きそうな顔して…」
「カズ！気が付いたん？」
「だから、何で泣きそうな顔してんの？」
「カズ…何でも無いんよ」
「それなら良いねんけど…ここ何処？」
「えっ、ここは病院」
「病院？何で？」
「何でって…頭痛が酷くて病院に来て倒れたんやん！」
「頭痛で？…そぉなんや…」
「覚えてへんの？」
「いや～ゴメン」
「もうっ、心配したんだからね！」
「ゴメンゴメン」
カズは笑いながら言う。
ウチはサキの言葉が気になったがカズの姿を見ていると何かの間違いだと思えた。
「ところで君は看護婦さんなん？」
「えっ…？」
「何か仕事で嫌な事あったん？」
ウチの脳裏に色んな事が過る。
『カズは、ウチの事が解らへん？それとも冗談？』
ウチは一瞬ドキッとした。
「何を言うてんのウチやん、香澄やんか！」
「香澄？…」
「ホンマに解らへんの」

「ゴメン…」
カズは、そう言うと寝息をたてる。
ホンマに記憶喪失なのだろうか？
それとも只単に寝惚けていたのか…今は解らない。
でも、カズが目を覚ました。
それだけでウチは凄く嬉しかった。
朝になるとカズは普段通りに目を覚ました。
それを見た看護婦さんが先生を呼びに行ったり、カズの御両親が来たりと何だかバタバタしていた。
ウチは昨日の事があったので病室の外から様子を見ていた。
夕方になるとスケ君とユウさんも御見舞いに来た。
「カズ～起きてるか～。」
「あら、ユウちゃん久しぶり。」
「あんた、大丈夫かい？」
「ホンマやわ、携帯は繋がらんし、出たと思ったらカズのオバチャンに病院で倒れた言われるし、しかも意識無い言われたからマジでビックリしてんで～。」
「いやぁ…バレちゃいましたか～」
「そんな呑気に言わんといて～。」
「あんた、死にかけてんで解ってる？」
カズは2人に責められている。
でも、カズはニコニコしながら2人を見ている。
『2人共、ホンマに心配したんやろなぁ…ウチにも、あんなに心配してくれた友達って居てたんかなぁ…』
そう思うとカズの事が凄く羨ましかった。
「ユウちゃん、そろそろ帰りましょか？」
「そんじゃ、カズ又くるなぁ。」
「今日は悪かったねぇ」
「全然良いさ。」
「気を付けて帰ってや。」

「おーっ！あっ、それと近々　ショウ君とこ、とアキラんとこも来るってさ。」
「マジで？連絡したん！」
「当たり前やん、みんな心配してたで。」
「はぅ～、マジでか。」
「んじゃね～、ちゃんと治しや。」
2人が帰って病室には静けさが戻る。
消灯時間になり、部屋は闇と静寂に包まれる。
ウチは、まだ部屋の外に居た。
「お姉ちゃん」
ウチは、驚いて声の方を向く。
「…サキちゃん」
ウチは少女の顔を見てホッとする。
「どうして部屋の外に居てるの？」
ウチは、その質問に答えられずに苦笑する。
「サキちゃんこそ、どうしたん？」
少女はニコッと笑うと。
「お姉ちゃんにバイバイしに来たの。」
「えっ？」
「サキね、ママと一緒にお家に帰るの。」
「そぉなんだ。」
「ママがね、ずっと泣いてるの…サキが死んじゃってから毎日ね泣いてるの…だからねサキね、ママの傍に居てあげるの！」
ウチの目に涙が溜まる。
「そしたら、ママも泣かなくなると思うの！このままだとママが可哀想だから、サキには居てあげる事しか出来ないから…」
「サキちゃんは凄く優しいね…」
ウチはサキちゃんを抱き締めた。
「でも、お姉ちゃんは可哀想だね。」
「えっ！何で？」

「お姉ちゃんは、中の人の事が好きなの？」
「…うん、凄く大好きなんよ。」
「でも、あの人…お姉ちゃんが一緒に居たら死んじゃうよ。」
ウチは少女の言葉に驚いて両肩を持って少女の顔を見る。
「どういう事なん？何でウチがカズの近くに居たらカズが死ぬん？何で？ねぇ何でなん？」
ウチは少女に詰め寄る。
「サキも良く解らないの。」
「じゃ、どうして…どうしてカズが死ぬなんて言うたんよ…」
「はしっこの部屋のオジサンがね昨日言ってたの、お姉ちゃんが中の人と一緒に要ると中の人の磁場って言うのが変になっちゃうんだって。」
「磁場？磁場が変になると、どうなるん？」
少女は首を傾げる。
「サキも良く解らないの、オジサンに聞いてみたら？ここの一番端っこの部屋に居てるよ。」
「ありがと、行ってみるね。」
そう言ってウチは奥に向かう。
「あっ！サキちゃん色々ありがとう、ママと仲良くね。」
「うん、お姉ちゃんも元気でね！」
お互いに手を降りあう。
通路の一番奥の部屋の前に男性が立っている。
「あの～すいません。」
ウチは恐る恐る声を掛ける。
「あの兄さんは、まだ生きてるかい？」
ウチは、その言葉にドキッとする。
「ウチが、ウチがカズの傍に居たら死ぬって…どういう事なん？」
ウチは怒鳴り気味に言う。
「…あんたには、解らへんか？」
男は少し笑いながら言う。

「解らんから聞いてんねやろ！」
「あの兄さん、霊が見えるやろ。」
「えっ？何で、そんな事が解るん？」
「霊が見える人間の磁場って特別でね、普通とは少し違う。」
「それで？」
「それに、あんたの磁場も普通の霊のモノとは少し違うんや」
「ウチもカズも特別なん？」
「あんたは、あの兄さんに憑いとるんやろ？」
「そやで！」
「特別な人間に特別な霊が憑いてるって事は、その人間の身体には凄い負荷が掛かるわなぁ特に磁場は脳に危害を及ぼしよる」
「あっ…」
ウチの頭に最悪な答えが導き出される。
「解ったみたいやなぁ」
「で、でもウチら離れられんのよ！」
ウチは少しパニック気味なる。
「それは、あんたの気持ち次第やろ？」
「ウチの気持ち？」
「あんたの未練は、あの兄さんやろ？」
それは、ウチにも解ってた事。
ウチがカズの事が好きだと言う事。
でも…今の関係を壊すのが嫌で解らないフリをしていた。
「あんた、どうする気なんや？このまま後2、3日一緒に居たら兄さんも死んで一緒に居れるで。」
「ウチは…ウチは決めた。」
「ほう～、一緒に居とくか？」
「今すぐ離れる。」
「えらい早いなぁ、そんな急がんでも2日位は傍に居れるで。」
「ううん良いいんよ、ウチが傍に居ればカズの記憶が消えるかも知れんから。」

ウチは、オジサンに頭を下げてカズの病室に戻る。
カズは静かに寝息を立てている。
「カズ…」
いざ、となると決心が鈍る。
「ウチは…」
自然と目から涙が溢れ出してくる。
「もう、あなたの声を聞く事が出来なくても。」
目から涙が流れ出す。
「あなたの笑顔を見る事が出来なくても、もっと、あなたと一緒に居たい。」
「本当は、サヨナラなんて　したくない。」
「あなたの笑顔を、ずっと傍で見ていたかった。」
「…もっと…もっと好きだと伝えたかった。」
その場に泣き崩れる。
「カスミ？ちゃんだっけ？」
ウチは、思わず顔をあげる。
「あっ…カズ…。」
「大丈夫？」
「えっ…うん大丈夫。」
ウチは急いで涙を拭う。
「俺は…俺は君に何をしてあげれる？」
「えっ？」
「何かさ、君の事を前から知ってる感じがすんねん。」
「カズ…」
「だから、オレは何をすれば君は笑ってくれるん？」
「…ううん…今までメッチャして貰ったから。」
「え…」
「でも、最後に1つだけお願いしても良い？」
「えっ、あぁ良いよ」
カズは微笑む。

『やっぱりウチ、カズの事が好きやなぁ～』
そう思うと又、目に涙が溜まる。
「それじゃ、少しの間　　目を閉じて。」
「そんな事で良いん？」
カズが目を閉じる。
ウチは、少しの間カズの顔を見る。
「もう、良い？」
カズが目を開けかける。
「カズ…」
ウチはカズにキスをする。
唇は触れ無いが、キスをした。
「カズ…本当にありがとう。」
「…」
「ウチはカズがメッチャ大好きやで！」
ウチは涙を流しながら最高の笑顔を送った。
するとウチの身体が薄くなり消えて行く。
「カズ…大好き…」
ウチが最後に見えたのは泣いてるカズの顔やった。

第１０夜（前書き）

香澄が消えて、ポッカリと心に穴が空いたカズ。
退院してからのカズの話です。

第１０夜

或る夜の出来事。
俺は回りから見れば凄く不思議な体験をした。
でも、俺には全く不思議には思えず…
その代わりに、凄く悲しく、それでいて少し良かったと心の隅で思える様な出来事だった。「カズ…大好き…」
そう言うと女の子の姿が消えて行った。
俺は、目から涙が溢れていた。
女の子が消えた後を涙を流しながら呆然と見ていた。
何とも言えない虚しさが俺の心に拡がる。
俺は、そのままベッドに寝転がる。
何も考えられずに何とも言えない気持ちのまま眠りにつく。
翌朝、目を覚ますと脱力感が襲う。
何だか、大事な物がスッポリと心から抜け出した様な何かを考える事さえ出来なくなっている。
そんな感じのまま一週間が過ぎ退院して自分のマンションに帰って来た。
代わり映えのしない空間…何かが物足りない。
病院から持って帰った洗濯物などを片付ける。
今までと変わらない筈なのに…部屋が凄く静かに感じる。
堪らずＴＶのスイッチを入れる。
数日間、留守にしていただけで他人の部屋の様に感じる。
俺は、バルコニーに出る。
何故か此所に出ると何かが解る気がした。
一瞬、何かが頭に浮かんだ直ぐに消える。
俺は、少しの間　その場から動かずに空を眺めていた。
次の日の夜は友達のスケのマンションで俺の復帰祝いをしてくれる事になっていた。

俺は久しぶりに自分の布団で寝たからか、昼前まで熟睡していた。
起きると少しだけダルさがマシになった気がする。
「さて、…とりあえずめしにしよ」
俺は、昨日に買って置いたスナックパンとバナナオレをテーブルに置く。
ＴＶを点けながら遅めの朝食を頂く。
約束の時間迄には時間がある。
録り溜めしていた番組を見る事にする。
「何か、バラエティーばっかり録ってるなぁ」
殆どがバラエティー番組しか入っておらず俺はバラエティー以外の番組を見る事にする。
気が付くと夕方の５時を過ぎていた。
「ヤッバ！用意しやんと間に合えへんわ。」
スケの所に６時に約束していたので慌てて支度をする。
俺は、自転車に跨がるとスケのマンションに向かって漕ぎ出す。
外は夕日がに照らされて綺麗なオレンジ色に染まっている。
俺は、向かう途中の墓地で自転車を止めていた。
「なんやろ…此処」
その墓地を通り過ぎようとした時、何故か気になり自転車を止めて墓地に近付いていた。
「此処…此処で何か…」
頭の中に幽霊らしい映像が浮かびあがる。
「お、お～っ！此処で俺、…幽霊見たんちゃうん！ヤバイって早よ行こ。」
俺は、慌てて自転車に跨がり墓地を離れる。
スケのマンションに着くと、スケの子供達が出迎えてくれる。
俺は、来る途中で買ったジュースや御菓子を渡す。
「早よ座って」
ユウに急かされて俺は席に着く。
「乾杯するで」

ユウに促されるまま缶ビールを持つ。
「乾杯〜！」
「カズ、退院おめでとーう！」
「あざーす！」
俺は、何だかホッとする。
こんな時には友達の大切さが良く解る。
いつもの世間話、アホな話、そんな話をしているウチに俺の入院の話になる。
「実は…余り覚えてへんねん…」
2人共顔を見合わす。
「前の日に、カズん所で呑んだ時に頭痛がするから病院に行きや。って言う話してたやん。」
「そんな話してたんや」
「はっ？」
2人は驚いた顔をする。
「ちょっと待って、私が誰か解る？」
「ユウ…」
「その辺は解るんや。」
「そりゃ解るって。」
「それじゃ、どれ位の間の記憶が無いん？」
2人して俺の顔を睨む。
「ん〜、たぶん1ヶ月位やと思うねんけど？」
「何で1ヶ月と思うん？」
「それは、天神祭に行ったんは覚えてんねん。」
「おーっ、それやったら確かに1ヶ月ちょっと前やもんなぁ。」
ユウは、納得したみたいだ。
「でも、1ヶ月も記憶が無いんやろ？」
スケが心配そうに俺を見る。
「1ヶ月位やったら何も無いって！どうせ私達と呑んだ事位しか無いって！」

ユウが笑顔で言う。
「そりゃそうやな！1ヶ月位で俺が何か有る訳無いもんなぁ。」
皆で笑う。
「この1ヶ月言うたら、花火大会位しか無いしなぁ」
ユウの言葉に一瞬、頭に花火大会が思い浮かぶ。
「どうせ、カズは花火を観ながら呑んでたんやろ。」
「…俺…花火大会に行ってる…。」
「えっ、何か思い出したん？」
「1人で行ったん？」
「えっ…2人で…行った…と思う。」
「2人？誰と行ったん？」
「くぅ…解らん…」
「無理せんで良いで。」
「…うん…大丈夫。」
「でも、一緒に行ったんが女の子やったら良いのになぁ。」
ユウが呟く。
「えっ…女の子やったで、たぶん。」
2人が驚く。
「それやったら尚更、思い出さなアカンやん。」
ユウが乗り出す。
「お見舞いに行った時に言ってた…あの、誰やったっけ？」
スケの言葉に間髪入れずにユウが。
「カスミちゃん！」
その言葉に俺は反応する。
「カ…スミ、カスミ、香澄。」
頭の中で総てが繋がる。
「あ～っ…そうか、思い出した。」
俺は下を向いたまま呟く。
「思い出したん？」
2人が乗り出す。

『アカン、俺…最低なヤツや…香澄の事を忘れるなんて…ヤバイ…泣く。』
俺は、涙が溢れそうになるのを堪える。
「あはは、あれ…勘違いやわ。」
「えっ、勘違いなん？」
2人は肩を落とす。
「そうやねん、花火大会は、部屋で呑んでての願望やし、病院は夢やったわ。」
「何それ～、カズにも春が来たんかと思ったのに。」
「いや～すいません、…便所行ってくる。」
「行っといで。」
俺はトイレに入ると、我慢していた涙が溢れ出す。
「くっ…ぐぅ…」
少しの間、俺は声を殺して泣く。
無理にでも気持ちを落ち着かせ顔を洗う。
トイレから出ると俺は何も無かった様に振る舞いながらビールを呑む。
小一時間が過ぎ0時を過ぎた。
「さて、そろそろ帰るわ。」
俺は帰る支度をする。
「今日は、ありがとね！ごちそうさま。」
「いいよ、いいよ又ねぇ。」
「お疲れ～」
俺は部屋を出て、自転車に向かう。
『ガマン、まだアカン。』
自転車に跨がって自分のマンションに向かう。
マンションに近づくに連れ涙が溢れ出す。
香澄を初めて見た墓地に差し掛かる。
俺は自転車を止めて少しの間、墓地の方を眺める。
「香澄…」

俺は再び自転車を漕ぐ。
部屋に帰って来ると電気も点けずに俺は布団に泣き崩れる。
「香澄…香澄…うぐっ、」
どれ位の時が過ぎたのだろう。
俺は力無く壁にもたれ掛かる。
「香澄…成仏したんやなぁ…」
又、涙が溢れてくる。
「香澄…成仏　出来て良かった、…でも、ホンマに俺なんかで良かったんか？…最後に好きなったんが俺なんかで良かったんか？こんな俺なんかで…」
静寂が流れる。
俺は、香澄の最後の言葉を思い出す。
「大好きだよ…か…ふっ」
俺は、宙を見上げる。
「自分の気持ちだけ伝えて消えやがって、…俺の気持ちも聞いてからきえろよな…」

夏も終わり秋を迎えようとしていた。
俺は、変わらずな日常に戻り過ごしている。
今のマンションも引っ越そうかとも考えたが香澄との思い出が詰まってる部屋を今の俺には出る勇気は無かった。
でも、気持ちの整理が出来れば引っ越そうと思っている。

第１１夜（前書き）

今作で最終話となります。
最後は、香澄の目線で話が進みます。
２人の恋の結末をお楽しみ下さい。

第１１夜

「ん…う～ん…」
目を開けると眩しい光が目に飛び込んでくる。
「カズ…ウチは天国に来れたみたいやで…」
涙が溢れ落ちる。
目が慣れてくると白い天井に蛍光灯が点いてるのが見える。
「…まるで病院みたいな所…！」
ウチは飛び起きた。
「えっ…あれ病院？」
ウチの腕には点滴が刺されてる。
起きたのは良いが身体が重く物凄いダルさがある。
とりあえず、ベッドに横になり天井を眺める。
「…生きてる…ウチは生きてる！」
自然と涙が溢れ出す。
「カズ…ウチ…ウチは生きてるよ…」
少しすると女の人が病室に入ってきた。
ウチは身体のダルさも有り薄目で女の人を見ていた。
『あっ、母さんだ…』
そう思いながら久しぶりに見る母さんは少し窶れている。
「香澄…今日も良い天気よ。
たまには、散歩に出てみる？」
母さんは、そう言いながら目に涙を溜めているのが見えました。
「何だか身体がダルいから今日は遠慮しとく。」
ウチは身体がダルいので断る。
「そうねぇ、余り無理をしても身体にわるいもんね…」
母さんは、そう言いながら目に溜まった涙を拭っていた。
母さんの身体が固まる。
「香澄…今晩…何が食べたい？」

「何だかダルいから軽い物で良いよ」
すると母さんは、イスから立ち上がると部屋の扉へと歩みを進める。
扉を開けると。
「荒木先生ー！香澄が、娘がー！」
母さんは、病室から飛び出して行った。
「病院内は走らないで下さい！」
「荒木先生ー！」
「お静かに！」

「これなら、もう安心ですね。」
どうもウチは3年位の間意識が無かったらしい。
「明日からでもリハビリの方を始めましょうか？意識が戻っても身体は3年のブランクが有るので直ぐには元の生活にはもどれませんからね。」
なかなか厳しい事をズバッと言う先生だ。
「ありがとうございます。」
母さんは、お辞儀をしながら先生を送りだした。
母さんはイスに座る。
「何か飲む？」
ウチは首を左右に降る。
母さんは、ウチが大学を卒業して大阪の会社に入社試験を受けに行った帰りに事故に有った事。
そして、そのまま3年位の間意識が無かった事。
時々、目に涙を溜めながらも話してくれた。
「あんな…」
ウチも、信じて貰えるとは思わんけど、幽霊になってた事を話した。
「カズって言って…メッチャ優しくて…本当に良い人で、幽霊のウチの事をホンマに大事にしてくれてん…ウチ、幽霊やってんで…ホ

ンマに人が良いと言うか…アホやねん…。」
「えらい、良い人と巡り逢ってんなぁ。」
「うん…逢えたんがカズで…ホンマに良かった。」それから、季節が過ぎ去り春を迎えていた。
「御世話になりました。」
「余り、むりを為さらないでくださいね。」
「退院おめでとうございます。」
ウチと母さんは病院の先生や看護師さんに見送られてタクシーで病院を後にする。
「あの…母さん。」「運転手さん、京都駅に行ってもらえます。」
「京都駅ですね。」
「母さん。」
「大阪に行きたいんでしょ?病み上がりなんだから無理をしたらアカンで。」
「母さん…ありがとう」
「カズさんに宜しく伝えといてね。」
母さんは微笑む。
「うん、伝えとく。」
暫くすると車は駅に着いた。
ウチは母さんと別れて電車に乗り新大阪に向かった。
カズには凄く逢いたい。
でも、夢だったのかも知れない。
…確かめるのが怖い。
自然とホームのイスに座りこんだ。

「どうしよう…もしも…もしもホンマに夢やったら」
『違う!カズは居てる!』
ウチは、強く思って新大阪の駅を後にする。
「確かに、このマンションや」

『良かった…夢じゃ無かった。』
緊張が切れてマンションの前で座り込んだ。
「後は、カズに…」
ウチは、生き返った事でテンションが上がっていたからか、嫌な事を忘れていた。
『此処まで来たけど…カズは、ウチが生き返ったん知らんし…それに…カズは…ウチとの記憶は…無くしてる。
ウチが離れる時には、もうっ！ウチとの記憶は無かった。』
絶望感に襲われた。
ウチは、そのまま塞ぎ込んで動く事が出来なくなっていた。
幾人かの人がウチの横を通り過ぎてマンションへと入って行った。
「何、あの子。」
「男に部屋から追い出されたんちゃう。」
「マジで、可哀想〜」

『アカン…泣きそう』
じわじわ哀しみが込み上げる。
帰るにも身体が動かない。
「そんな所でジッとしてたら風邪ひくで〜」
男の人が通りすがりに声を掛けて行く。
「…」
「あのさ…」
男の人が戻ってきた。
「こんな所で女の子が1人で座ってたら危ないし、せめてマンションの中で待ってたら？」
「…」
ウチは、座り込んだまま首を左右に降る。
「そっか…」
男の人は、離れて行った。
「こんな所に座って…ウチ邪魔やなぁ」

「ほい、あげる」
男の人はウチの手に　温かいココアを持たしてくれた。
「あっ」
『あったかい…凄く温かい。』
「飲まんでも良いし、持ってるだけでもマシやろ。」
「あ…ありがとう。」
ウチは顔を上げて御礼を言う。
「…カズ…カズ～」
ウチの前には紛れも無くウチの知ってるカズの顔があった。
思わずカズに抱きついた。
「ご、ごめんなさい。」
ウチは嬉しかった、又、カズに逢えた事が本当に嬉しかった。
そしてカズの優しさも気の良い所も変わって無い事も本当に嬉しかった。
「香澄…」
「えっ…」
ウチはドキッとする。
「あっ、ごめん…俺の方こそ…ハハハ…つい、知ってる子に似てたから…」
『もしかして、カズ…記憶が戻ってる?』
「何で俺の名前　知ってんの?」
「えっ…」
ウチは、正直に話すか悩んだ。
「信じて貰えるか解らへんけど…聞いてくれる?」
「俺で良かったら。」
カズは前と変わらん笑顔で答えた。
「でも…せめてマンションの中に入らへん?」
「うん」

カズはウチの手を引っ張り起こしてくれる。
身体が素直に動く。
「さすがに、男の1人暮らしの部屋には入りにくいやろうからね。」
そう言ってカズは自分の上着をウチに羽織らしてくれた。
「やっぱり優しいなぁ…」
「そんな事ないって。」
ウチは、3年位前に事故に遭い意識不明だった事。
その間、幽霊になっていた事。
そして、幽霊の時にカズって言う優しい人に逢った事。
その人は、幽霊の自分に凄く良くしてくれた事。
幽霊なのに、その人が大好きになった事。
「えっ…それって…」
ウチは、カズの口を指で塞ぐ。
「そして、そしてね…ウチの影響で入院したの…」
ウチはカズの病院での一部始終を話した。
「それで、ウチは天国に来たんかなぁ　と思ったら病院やってん…」
カズは黙って聞いてくれてる。
「それで、8ヶ月位の間そのカズに逢いたい一心でリハビリに励んで本日退院いたしまして今に至ると言う訳。」
カズは下を向いて泣いている。
「良かった…又、香澄に逢えた…」
「カズ…」
カズは、ウチを包み込む様に抱きしめた。
「香澄…おかえり…」
ウチもカズを抱きしめる。
「…ただいま…」
幽霊の時には出来なかった。
諦めていた。
でも、今はカズに触れる事が出来る。

カズが触れてくれる。『ウチは今、凄く幸せや。』
「香澄…」
「…んっ？」
「ずっと、こうしてたい。」
「…ウチも。」
「でも、さすがに此処で抱き合ってる訳にもなぁ。」
2人で顔を見合わす。
カズは、ウチの涙を手で拭ってくれる。
「時間は、まだ有る？」
カズは自分の涙を拭いながら問いかける。
「うん、まだ大丈夫。」
「それじゃ、香澄の身体も冷えてるから部屋で話せへん？」
「うん。」
「いっぱい話したい事が有んねん。」
「ウチも、まだメッチャ有るんよ。」

カズの部屋に着く。
何だか凄く懐かしい感じがする。
「どうぞ。」
「お邪魔します。」部屋に入るとウチの記憶のままの部屋だった。
変わっているのはテーブルにコタツ布団が掛かっている事だけ。
「コタツ…出したんだ。」
「そりゃ冬はコタツでしょ。」
「それ以外は変わらないね。」
「そんな事　無いで。」
「えっ？」
「少し、綺麗になった。」
「もう、ウチが居た時より汚ないんちゃう。」
「マジで！」

「あはは」
その後は、時間が許す限り話をした。
2人で居た時の思い出話。
その時の気持ち。
カズが記憶を無くしてた時の話。
ウチが、生き返ってからの事。
ウチが消えてからのカズの事。
時間は驚く程に早く過ぎて行った。
「そろそろ送るわ。」
「良いって。」
「帰りに何か有ったら嫌やし、香澄の事が大事やから。」
自然と顔が紅くなった。
「ありがとう。」
そして、ウチらは駅へと向かった。
駅へ着く迄の間に次の日曜に逢う約束を決めた。
駅の改札で別れを惜しんでいると。
「香澄、ちょっと待ってな。」
カズは、そう言いながら携帯を取り出す。
番号やアドレスは、さっき交換したばかり。
「香澄、笑って！」
カズは携帯のカメラを構える。
ウチは、笑顔でポーズをとった。
カシャッ。
「気を付けて帰ってな。」
カズは、ニコッと笑いながら言う。
「ズルイ！ウチも！」
「俺、撮られんの嫌やねん。」
「なんで～。」
「寿命が縮むやん。」
「なんでやねん！」

カズは、ウチを抱きしめる。
「また日曜な。」
「ズルイなぁ。」
ウチは、カズに手を振ってホームに向かった。

帰宅したウチを待ってたのは心配した父さんと母さんの顔だった。
父さんが、寝た後に今日の出来事を母さんに話した。
母さんは、ただ黙って最後まで聞くと。
「良かったね。」
そう言いながらウチを抱きしめてくれた。
それからは日曜日迄の間、毎日カズと電話やメールのやり取りをした。

日曜日の朝。
「いってきまーす。」
「気を付けてね。」
ウチは母さんに見送られて家を出た。
新大阪の駅では、カズが待っていてくれた。
今日は幽霊じゃ無い生きてるウチとカズとの初めてのデート。
そう思うとドキドキが止まらない。
カズを見ると少し緊張した顔をしてる
ウチらは、今までの時間を取り戻すかの様に楽しんだ。
次第には緊張も無くなり、手を繋ぐ様に迄なっていた。
日も落ちて辺りは街灯が点き始める。
駅への帰り道。
「香澄…。」
「んっ、何?。」
「あのさ、…俺と付き合ってくれへん?」
「えっ?な…」

「まだ、ちゃんと伝えてなかったから…俺は、お前の事が大好きやねん…だから今日から、この先の香澄の人生を護らしてくれへん？」

「…ウチの気持ちは解ってるやろ…ずっと護ってなぁ。」
「よっしゃーっ！」
駅に帰る前に少し公園に寄る事にした。
段になっている所に座り雑談をする。
「香澄。」
「ん～？」
いきなりカズの唇がウチの唇に重なる。
ウチは驚いたが、そのまま瞼を閉じた。
初めてのキス。
少し強引だけど嬉しかった。
唇が離れると、お互いに少し照れていた。
「そろそろ行こか？」
カズは立ち上がった。
ピロリン
ウチは、その姿を携帯で撮る。
「…撮った？」
ウチは無言で微笑む。
「3年縮んだわ～…行くでぇ。」
カズは手を差し出した。
「…うん。」
ウチは、手を引っ張ってもらい立ち上がる。
駅前の交差点で信号待ち。
『まだ、一緒に居たい。』
そんな気持ちで、いっぱいになる。「ママー」
女の子が車道に飛び出す。
「危ない！」

ウチは、無我夢中で飛び出していた。
「香澄ーっ」
キキーッ！！
『ああ…ウチは結局、死ぬんやなぁ…でも、この子がウチみたいに成らずに良かった。…ごめんなぁ～カズ　せっかく生き返って逢えたのに、ホンマ…ごめんやでぇ。』

ドンッ！！

「事故や！救急車！」
「姉ちゃん大丈夫か？」
「えっ…あれ？　生きてる。」
ウチは、体を起こす。
「美羽ちゃん」
女の人が駆け寄ってくる。
「ママー」
女の子は泣きながら、その母親にしがみついた。
「おい、大丈夫か！」
走ってきた車の前で人が騒いでる。
「えっ…何？」
ウチは、異様な胸騒ぎがした。
「すいません！通して下さい！すいません！」
ウチは、その人だかりの中へ入って行く。
そこには、頭から血を流して倒れているカズの姿が有った。
「カズーッ」
ウチは人を掻き分けカズに駆け寄る。
「どうして…どうして、こんな事に…」
「…か…すみ…無事やってんな…良かった。」
カズは、息も絶え絶えに口を動かす。
「カズ！しっかりして！なんで…なんで…ぐっぅ…」

「香澄の…人生を…護るって…約束したやん…」
「…カズ…死なんといて…ウチはカズと行きたい所も、やりたい事もメッチャ有んねん！」
「死ぬ訳ないやん…やっと香澄と付き合ってんで…簡単には…死なれへんて…」
カズの息が荒くなる。
「もう、喋らんといて！ムリして喋らんで良いから！」

「すいません！通して下さい！」
救急車が着いてカズが載せられた。
「ウチも行きます。」
「あなたは？」
「カズの…この人の彼女です！」

病院には、カズの両親が駆けつけてきた。
「あなたは、大丈夫？」
両親は、ウチの事を責める事もせず反対にウチの事を気遣ってくれた。
手術中のランプが消え、中から先生が出てくる。
「先生、どうなんですか！」
カズの両親が先生に駆け寄る。
「全力を尽くしましたが…申し訳ありません…」
カズの母親は、その場に泣き崩れ、父親が肩を抱き抱えてソファーに座らした。
ウチもソファーに崩れる様に座り声を上げて泣いた。

翌々日、カズの葬儀が執り行われた。
ウチは、御通夜にも葬儀にも出る勇気が無かった。
でも、母さんの薦めも有り葬儀には参列した。
カズの両親の怒りを総て受け止める気持ちで。
だが、カズの両親はウチの両手を握って励ましてくれた。
今日、聞いた事話によるとカズはウチの事を両親に話してくれていたらしい。
「今度、彼女を連れて来るから！この写メの子」
そう言いに帰って来ていたとの事。
ウチは涙が止まらなかった。
葬儀も終わり、ウチが帰ろうとした所、１組の男女に呼び止められた。見た事のある２人だった。
スケさんとユウさんだった。
「あんたが香澄さんやんなぁ？」
「はい…そうです。」
「写メで見るより可愛い子やん。」
「えっ…」
「カズが、この前に嬉しそうに写メ見せながら自慢しててん。」
「つい半年位前からかなぁ…メッチャ落ち込んでて元気も無かったのに、この前は前のカズに戻ってたもんなぁ。」
「それ以上に元気やったんちゃう。」
「その時にカズが言うてたんよ、この子は俺の大事な子やねん…だから何が有っても護るってさ。」
「カズ…」
「だから…最後に１番大事な物を護れて満足やと思うで。」
２人は必死に涙を堪えながら話してくれた。
「そうや、後こんな変な事も言ってたで。
前にこの子に幸せをメッチャ分けて貰ったから、今度は自分が幽霊になったら幸せを分けたるってさ！だから、香澄ちゃんの後ろで幸せを分けてるかもよ！」

ウチは、何も言えずに頷く事しか出来なかった。

今年の夏を迎えた。
まだ、立ち直れていないがカズが幸せを分けてくれているのにウチが落ち込んでいられない。
「カズ…今日も見護っていてね。」
ウチは、カズの写メに今日も微笑み掛ける。

第１１夜（後書き）

長い間、御愛読して頂き有り難うございました。
月に１話とスローペースなのに本当に沢山の方に読んで頂けて本当に嬉しかったです。
特に関西弁の文が読み辛かったと思います。
なにしろ、初めて書いたもので色々と可笑しな点やご不便な点が有ったと思いますが最後まで読んで頂き本当に有り難うございました。

届いた手紙（前書き）

前回で
悲しい恋愛
は終了させて頂いたんですが。
累計アクセスが
１万を突破しましたので読んで頂いた方々に感謝を致しまして特別編を投稿させて頂きました。
皆さま、本当にありがとうございます。
それでは、どうぞお楽しみ下さい。

届いた手紙

カズと最初で最後のデートをした日から1ケ月が過ぎようとしていた。
ウチは、何をして良いのか解らずに幾日も過ぎていた。
「うっ…カズゥ～…うぅ…」
もう、涙も出なくなっていた。
ウチは塞ぎ込んだまま何もする気が起きなかった。
ウチはカズの事を忘れられずに泣いていた。
ピンポーン…
誰か来たのか家のインターホンが鳴る。
母が玄関に向かう足音が聞こえた。
ウチは、動く気力さえ無い。
少しして部屋に足音が近づいてくる。
「香澄、荷物が届いたわよ。」
ウチは、母に心配を掛けまいと涙を堪えて返事をする。
「はーい」
微かに声が震える。
「ここに置いとくね。」
母は、そう言うと部屋から離れて行った。
ウチは涙を拭くと部屋の扉を開ける。
足下には白い箱が置いてある。
ウチは、とりあえず部屋に持って入る。
送り主の欄には花屋さんらしき名前が書いてある。
ウチは、箱をテーブルの上に置くとベッドに横たわる。
大事な人が居なくなる事が、こんなに辛くて悲しく…二度と会えないと思うと涙が自然と出て止まらない。
「カズ…」
ウチは少しの間そのまま動く気がしなかった。

寝返りをうつと白い箱が目に入る。
さっき届いた白い箱。
「何やろ…これ。」
ウチは涙を拭きながら箱の前に座る。
「ふーっ…」
ウチは溜め息を1回して箱を開ける。
中には小さな鉢植えに植えられた花が綺麗に咲いていた。
「かわいい…」
ウチは少し笑顔になる。
中には鉢植えと一緒に手紙が入っている。
ウチは鉢植えを取り出しテーブルに置いてから手紙を取り出す。
表には
「香澄へ」
ウチの名前が書いてある。
裏を見る。
「カズ」
ウチは、一瞬何が何だか解らなかった。
「な、なんで…なんでカズから…?」
封筒から手紙を取り出す。

『ビックリした?
今日は、俺と香澄の大事な日やから…って覚えてる?』
「大事な日?」
『たぶん解らんかな?
今日は、俺と香澄が初めて出会った日やねん!
まぁ、その時は香澄は幽霊やったから余り覚えて無いと思うけど…
でも!俺にとって大事な日やし香澄も思い出してくれたら大切な日
になるから。
これからは、今までの分も取り戻す位に幸せになろな!

P・S
香澄
俺の前に現れてくれて
ありがとう
俺の事を好きになってくれて
ありがとう
これからもよろしくね！

それじゃ、今から香澄との初？デートに向かいま～す。　『

「これ…あの日に…」
「…あほ…」
涙が手紙に落ちる。
「カズが居らんのに、どうやって幸せにしてくれるんよ…」
「早くしてよ…ウチを早く幸せにしてよ！
お願い…お願いだから…」

ウチはテーブルの上で腕に顔を埋める。
「会いたいよ…カズ…会いたいよ…」
幽霊だった頃の思い出が溢れ出してくる。
初めてカズに会った時の事。
一緒に出掛けた事、花火大会の事。
ずっと一緒だった。
カズの優しさが胸に広がる。
泣き疲れたのかウチは、そのまま眠りにおちた。
夢でカズに会った。
カズは変わらない笑顔でウチを優しく抱き締めてくれた。
「ゴメン…ホンマにゴメン。」
カズは、抱きしめたまま謝る。

ウチは、ただただ首を横に降る事しか出来なかった。
「俺も、もうちょい頑丈やと思ってんけどな。」
「あれはウチが！…」
言い掛けるとカズはウチを強く抱きしめた。
「何を言ってんねん、大事なヤツ守れてんから俺は満足やで。」
「でも！ウチが…」
「香澄…」
「…」
「もし、あそこで俺が何も出来へんかったら俺は一生　自分を許されへんと思う。」
「カズ…」
「だから1番良い選択したと思ってる。
だから、せめて自分の中だけでも美化させといてや。」
「あほ…」
「だから香澄も、これからは自分が幸せになれるように生きて欲しい。」
「…うん」
「俺は居らんけど、いつも傍にいてるから。」
「意味わからへん」
「あは、ホンマやなぁ」
「ふふ…ホンマあほやなぁ」
ウチはカズに顔を埋める。

ウチは、誰かに頭を撫でられた感じがして目を覚ます。
「…カズ」
ウチは涙を拭くと両頬を両手で叩く。
「よしっ！」
「こんなウチをカズには見せられへん。」
ウチは、顔を洗いに部屋を出た。

『やっぱり香澄には笑顔が似合う。』

届いた手紙（後書き）

いかがでしたか？
決して上手くは書けて無いと思いますが、少しでも皆さまの心に残れば嬉しく思います。
ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0696h/

悲しい恋愛

2011年6月2日23時26分発行